



総長回章 第一号

会の精神はマリアの精神

第一部：マリアと共にキリストの中に

マヌエル・ホセ・コルテス、SM
マリア会第十四代総長

2007年3月25日
お告げの祝日

目次

I. 私たちの歴史に於けるマリア信心の流れ.....	7
1. 1 会創立のカリスマの中心にあるマリア	7
1. 2 マリア的孝愛	10
1. 3 二十世紀後半に於けるマリア論の転換とその影響.....	13
1. 4 私たちの “マリア論の転換” の取組み： 私たちがなしたこと、そしてなすべきこと	19
II. キリスト教生活の中心にあり、その中心からの存在であるマリア (『生活の規則』 第一章についての省察)	21
2. 1 キリスト教生活の中核： キリストとの一致の秘義を生きる	21
2. 2 私たちのキリスト教生活の秘義の中心にあるマリア： ご託身からカルワリオまで.....	26
2. 3 マリアの母としてのミッション.....	29
2. 4 世の救いのためのマリアの子供たち.....	33

会の精神はマリアの精神

第一部： マリアと共にキリストの中に

親愛なる兄弟の皆さん、

今回の総会が皆さん全員の名で私に託された統治と指導の任務を遂行するに当たって、初めて皆さんにこの書面を認めています。『生活の規則』の言葉によれば、この任務は福者ギヨーム・ジョゼフ・シャミナードの証しに従って“会の一致の目に見える印し”となり、“会のカリスマを保持し、強化し、広めること”¹ 以外の何ものでもありません。その責任の大きさは私を押しつぶし、それを前にして私は途方にくれています。ただ、いつも私の中にしっかりと現存しておられる聖母マリアのおかげで、私はこの任務を受け入れることができ、また、私の兄弟たちを通して私を召されたのは主ご自身であり、聖霊ご自身が私の貧しさに豊かさを与えてくださるという確信に支えられて、これを受け入れていくことができるでしょう。従いまして、私があえて皆さんに私の考察と提案を示そうとするのは、単純にこのことに信頼するからなのです。限られた内容ではありますが、皆さんの好意のこもった兄弟的な受け入れを通じて、聖霊が会の善のため豊かなものとしてくださるであろうと私は確信しています。

題名が示すとおり、私の最初の回章はマリアについてです。何故でしょうか？皆さんと分かち合う必要がある最初の考察と提案はマリアについてでなければならない、と私に決めさせたものは何だったのでしょうか？ 私はこの回章を書くためのインスピレーションを次の二つの事実から得ています。

¹ 『生活の規則』第7-44条。

第一の事実は以下の通りです：25年前にマリア会が時代に相応しい新しい『生活の規則』を制定して以来、私たちが自分のカリスマを生きるに当たってマリアが当然占めるべき中心的位置を彼女に与えよう、という声が常にありました。この呼びかけは最近の三つの総会、中でも『希望のなかの連帯』（1996）と『マリアと共なるミッションにて』（2006）で更に緊急なものとなっています。私たちのマリアニスト修道生活の刷新は私たちの生活の中に創立者のマリア的体験の深みを持ち込む事に掛かっているのです。²

第二はこの刷新がまだまだなされねばならないという事実です。少なからぬ兄弟たちにとってマリアとの関係は解決されていない問題となっており、自分達の霊的生活に十分に組み込まれていないか、または、ぼやけてしまった状態にあります。他の兄弟たちにとっては、この関係は不活発なものとなっており、その結果、今日の生活とミッションは不毛なものとなっています。1996年の総会が、マリア図書館・国際マリア学研究所の責任者たちによって提出された提案の示唆に従って、私たちのカリスマのマリア的性格をどのように生きているかについてマリア会の全修道者にアンケートを行うことを適切と判断したことを思い起こしてください。³

² 『生活の規則』 制定後の最初の総会の報告として、ホセ・マリア・サラベリ神父は“1986年の総会における聖母マリアの現存”と題する回章を書いています。その中で、神父は次のように述べています：“マリア会は、マリア的な特徴を前面に力強く押し出すことによるのみ、刷新されるでしょう。“聖母マリアの所有物”（『生活の規則』、第14条）であるマリア会は、おとめマリアの現存をはっきり打ち出さない限り、そのアイデンティティーを強く主張することはできません。特に、“イエスの愛弟子のように、マリアを神からの貴い恵としていただく”（『生活の規則』第6条）マリア会員一人ひとりの心の中に現存されるマリア、一つひとつの共同体と宣教活動の中に現存されるマリア、このようなマリアの現存を打ち出すことが必要です。（『総長回章』14号、1986年12月8日、p. 1）

³ この提案の内容は以下のようなものでした：1981年の総会が生活の規則の改訂版を承認して以後、マリア会はその新しい会則を漸進的に自分のものにするという困難な課題に取り組んできました。この取り組みがどこまで、また、どの程度深まったかを確かめ、評価する時期が来たように思われます。私たちは、なによりも会のマリア的性格との関連で、このような評価を実施するよう提案したい。この提案は三つの観察に基づいています。それは、① マリアのイメージについて会員の中にはある程度の不安があることがわかりました。マリアは私たちの霊性

このアンケートの結果をコメントしてホセ・マリア・アルナイス神父は書いています：“時として、マリア会はマリアに献身するために、また特にマリアを知らせ、愛させるために何がベストなのか、どの方向に進むべきかが分からないことがあります。総本部と各管区・地区本部は、マリアがマリアニストの生活に当然占めるはずの位置を確かなものとするような明確な計画を実施するよう促進しなければなりません。このアンケートは、私たちが真剣なマリア学と、イエスの忠実な弟子に相応しい心構え、つまり、私たちの活動にマリアの精神を受肉させるような行動、が必要だと示しています。私たちは、今日、30年前に受けたマリア学の養成では最早やっていけないのです。マリアの秘義に入るためには、マリアに関する考え、感情、行動を学び刷新することが求められているのです。”⁴

以上二つの事実を動機として、今回の回章は皆さんがこの養成のプロセスを歩むための手助けになりたいと試みるものです。この回章全体が目指すことは、マリアとの意義ある生活の基礎を築くことです。さて、私たちのマリアとの霊的關係は私たちが頭と心の中で彼女について私たちが抱くイメージに根ざしています。従って、私たちのマリア的生活の刷新と深化はこのイメージの刷新と深化を意味します。と言うことで、私が今提示しようとしている考察は、霊的なものであると同時に、神学的なものでもなければなりません：真実の“信心”に焦点を合わせつつも、これら考察はまた“健全な教義”を含むものでなければなりません。

にとって本質的だと、考える会員がいるし、マリアに対して自分たち個人の霊的生活に重要な場を与えるときに、ある種の困難を感じる会員もいます。他の会員はマリアを信仰上の不確定要因だと見ています。マリアは、マリア会が保守的で感傷的な修道会であるかのように感じさせる不名誉のしるしのような方になるかもしれません。② 現在、マリア的霊性にとって中心的なものであるいくつかの具体的な観点を自分のものとし、また、それを生きていくことが、私たちにとって益々困難になっていることも感じています。たとえば、マリアの霊的母性、マリアとの契約、マリアに対するキリストの態度を模倣すること、マリアへの奉獻、などです。③ 最後に、私たちには、力強く、宣教熱に溢れたマリア的なダイナミズムが欠けていると思います。(J.M. Arnaiz, P. González Blasco, J. Roten, 『With Mary toward the future』(マリアとともに未来へ), SPM, Madrid, 2000, pp. 113 ff.)

⁴ 同、p. 61.

同時に、この回章は銀祝を迎えた『生活の規則』に対して敬意を表す試みでもあります。この回章を読みながら皆さんが私たちの規範となるテキストの歴史をより良く理解し、深く評価する助けとなる光明をそこに見出すことを私は願っています。この回章の題名として『生活の規則』第一巻の最後の文⁵を私が選んだのは、その文が私たちのカリスマの本質的にマリア的な性格を表現しているからだけではなく、それがまたこの規則自身の究極的な総括、精髓たらんと試みだからです。

私が皆さんに提示しようとしている考察は二部に分かれています、それぞれの題名は：I. “マリアと共にキリストの中に”、II. “マリアと共なるミッション”となっています。

これら二つは切り離せないものです。これらは霊的生活の二つの要素であって、いずれも他の一方を欠かせません。私たちをミッションに駆り立てる生き方なしには、誰も“キリストの中に”生きることは出来ませんし、逆に“キリストの中に”ある生き方からでなければ、私たちは“ミッション”に生きることができないのです。しかしながら、ページ数の関係で、また、双方の重要性を強調するために、私はこれら二部を時間的に分けて発表することにしました。従って、この回章では第一部“マリアと共にキリストの中に”のみとし、第二部は後日、他の回章で取り扱います。こうすることで、これら二部の内容を注意深く吸収するためにもっと時間をかけることができるし、同時に、読者がどちらか一方に重点をおき過ぎて、他方がおろそかになる危険を避けることにしたいと思います。

この第一の回章“マリアと共にキリストの中に”は二つの部分に分かれます。第一部“私たちの歴史に於けるマリア信心の流れ”は、私たちのマリア信心の現状を位置付け、理解するために過去にさかのぼってみます。第二部の“キリスト教生活の中心にあり、またその中心から出てくるマリア”で、私は『生活の規則』、第一章のマリアに関する条項につ

⁵ 『生活の規則』第 114 条.

いて考察を巡らしながら、その基礎を示すよう務めてみます。

I. 私たちの歴史に於けるマリア信心の流れ

1.1 会創立のカリスマの中心にあるマリア

私たちのカリスマのマリア的基礎は明白であり、私たちの歴史の中でマリアの現存は創立当初から現在まで基本的なものとなっています。創立や規範に関する会の文書、それに生活そのもの、そしてわたしたちの名に至るまでがこのことをたっぷりと証明しています。

マリアニストの生活は、創立者である福者ギヨーム・ジョゼフ・シャミナードがマリアの中に見出した特別な理解と生き方を基礎としている、ということ私たち全員知っています。この理解と生き方は、マリアに近づき、観想する創立者の特別な方法によって、創立者に吹きこまれたものです。創立者のマリアへの近づき方は単なる信心上の興味を動機としたものではなく、また教義を深めようとしたものでもありませんでした。シャミナード師は言語上のアカデミック、技術的意味での神学者ではなく、教師でもありませんでした。師は情熱あふれる宣教師、師と同時代の世界に福音を述べ伝えることに徹底的に専心し、当時のえせ哲学と世俗主義にさらされていた神の民を信仰に導くため身も心も捧げきった人でした。師の宣教的熱情はその一生を通じて彼が生き、行った全ての中心軸となっています。師の熱情は師の視線をマリアに向けさせ、その結果、マリアについての観想は師の宣教師としての推進力を育て、導いたのでした。

この観点に基づいた師のマリアについてのイメージは非常に顕著な特徴を帯びていて、師の手記やノートに繰り返し現れてきます。私たちは皆それを知っていますが、この考察を始めるに当たってそれらの特徴を思い出してみるの適切なことと思います。それはこれらの特徴が、原点を思い起こさせるもの、刺激を与えて思い出させるものとして、この考察の間中私たちの念頭に浮かんでいてもらうためです。私たちはこれらの特徴を自分達のカリスマ、教会の中での私たちの特別なあり方の構

成要素として絶えず参照する必要があります。これらを以下のように要約出来ます：

- a) マリアは救世の歴史の中で固有のミッションを持っています。教父たちの教えに基づいて、シャミナード師は“創造と最初の罪から始まって新しい創造の中での死に対する生命の最終的勝利に至るまでの救いの歴史全体”を背景にしてマリアを観想するのです。旧約聖書の中で前もって示され、選ばれ、無原罪の宿りで恩寵に満たされ、贖いの秘義にあって御子に協力し、被昇天で御子と共に凱旋するマリアを師は見るのです⁶。私たちはマリアの中に、御子によって新たに贖われた人類、“恩寵に満ちた”⁷ 人類を、イコン聖画のように見ることが出来るのです。
- b) マリアが神から選ばれ、召されることとなった救世史の中での彼女固有のミッションは御子を生むことでした。これは生み、教育育てる母性的ミッションであり、御子の中にあって全ての子にまで及ぼ

⁶ “マリアの使命は、カルワリオで終わることはありませんでした。死の苦しみより強かったマリアは御子と私たちへの愛によってその使命を生き続けられたのです。千々に砕かれた命であってもその死よりも強かったのです。新しいエバとして子供たちに必要であったマリアは、その初子の復活の秘義にあずかり、また、御子の勝利のご昇天にもあずからなければなりません。更にマリアは高間でご自分を囲む使徒たちの気配りをし、新生の教会に母性的な配慮の手を差し伸べ、これを確立し、教育し、時代の困難な歩みの中で、これを導かなければなりません。それはより長くマリアを留め置くことがふさわしくない地上から、マリアが天使たちの手で天高くイエス・キリストの玉座まで引き上げられるまででした。”（『マリアに関する記録』第2部、no. 475）

⁷ マリアに関する書物の中でシャミナード師に二番目によく引用される福音書の言葉は、天使の“おめでとう、恵まれた方。主はあなたと共におられる”（ルカ 1:28）という挨拶の言葉です。この挨拶の中に、シャミナード師は新しい創造に関するよき知らせが要約されているとみていた。マルシャンを引用して師はこう書いている：“‘おめでとう、恵まれた方。’おめでとう、というのは、喜びください、幸せな方、恵まれた方ですから。エバの名が変えられればいいのですが。天使はマリアとエバを比較するために現れました。すなわち、マリアの喜びとエバの苦しみを、マリアの祝福とエバの不幸を、マリアの恩恵とエバの罪を、マリアの影響とエバの影響を比較するために。”（『マリアに関する記録』第1部、no. 268）

されるご託身と繋がるミッションです。マリアに関連してシャミナード師が最も好んで引用した福音書の言葉は十字架上のキリストの言葉、“婦人よ、これがあなたの子です”⁸ と、マリアを紹介するマタイ福音書の“このマリアからイエスがお生まれになった”という言葉でした。⁹

- c) マリアのミッションは彼女の信仰に基づき、そして展開され、その信仰を通してマリアは神の計画実現のため聖霊の手に自分自身を完全に、無条件に委ねたのでした。マリアの信仰、“私は主のはしためです。あなたのお言葉の通りになりますように”は、神が世界に入りそれを救うために必要とした人間の“場”なのです。¹⁰

- d) こうしてマリアは人間の歴史の悪に対する神の勝利に、そして“彼女はお前の頭を踏み砕くであろう”という当初の約束の実現に貢献したのです。¹¹

⁸ ヨハネ 19：26-27.

⁹ マタイ 1：16 1822年の黙想の念祷18と題した中でこの聖書の表現について師は次のように言っています：“マリアについて話そうと思う説教者は、その話の内容が何であれ、このマリアからイエスがお生まれになった”ということに常に戻らねばなりません。（『マリアに関する記録』第2部、no. 790）

¹⁰ 堅固な平和を実現するために絶対に必要な三つの事項。すなわち、（1）当事者が和睦を結ぶために安全に会うことが出来る場所。（2）平和を実施に移すために双方が満足する手段。（3）平和を維持するために双方によって受け入れられる保証。この秘義において、マリアは、FIATの言葉などによって、神と人類の間に和解をもたらし、平和を実施に移し、それを維持するために必要な場所、手段、そして、保証を提供しました。（『マリアに関する記録』第1部、no. 402）

¹¹ 創世記 3：15. 1839年の黙想説教者に宛てられたあの有名な手紙の一説を思い起こすだけで充分です：マリアに力は衰えていないからです。私たちは、マリアが他のすべての異端同様、この異端に対しても、勝利を得られることを確信しています。それはマリアが今日でもかつてのように卓越した婦人、“蛇の頭をふみくだく”ために約束されたあの婦人だからです。そして、マリアをこの偉大な名でしか呼ばれなかったイエス・キリストは、マリアが私たちの希望であり、喜びであり、地獄の恐怖であることを私たちに教えられました。したがって、マリアには現代に対する偉大な勝利が保留されています。そして、私たちに迫る信仰の挫折からこの信仰を救う榮譽がマリアに託されています。（『マリアに関する記録』第2部、no. 74）

御子の救世のミッションに緊密に結び付けられたマリアのミッションは、御子のミッションが御昇天で終了しないのと同様に、被昇天で終ることはなく、また終る事はできず、歴史の中で永続します。シャミナード師が生きた時代と同様な信仰の危機の時代にあって、このミッションはいわば更に緊急なものとなるのです。シャミナード師はこのことを極めて明確に理解し、そしてこの観点から、自分自身とマリアニストを、今日、マリアのミッションに協力するために召されたものと見なしました。¹² シャミナード師にあって、マリアを観想することは宣教者としての召命へと変容していったのです。私たちはマリアによってその子供として養成され、彼女の“助け手”、彼女の“同盟者”となり、師が会の創立を決意した日にラランヌ神父に言ったように“謙遜のうちに婦人の踵となる”ように召されているのです。

私たちのカリスマを決定付けるこれらの大きな特性が述べられた今、私は皆さんに自問していただきたいのです：私たちは過去に於いてこのことをどのように生きてきたでしょうか？ 今、どのように生きているのか？ 私たちの歴史のこの時点にあって、これをどのように生きるよう私たちは召されているのだろうか？

1.2 マリア的孝愛

シムレル神父は、マリアニストとしての私たちのマリアとの特別な関係を“孝愛”という表現で要約しました。この表現はシャミナード師から来たものではなく、師はこの語を決して使用してはいません。この表現はカイエ神父から来ており、1891年の会憲に取り入れられています。この会憲の中で、これは会の“特有のしるし”として示され、私たちの

¹² 二つの会とその会憲を紹介するに当たって、シャミナード師が1838年9月16日付で教皇グレゴリオ十六世に提出した手紙の最後から二番目の節をここで思い起こすのが適切と思われます。“この両修道会は固有の名称として尊きマリアの名をいただきました。全世界にマリアの名を知らせ、マリアをたたえさせ、マリアを愛させることができると念願致しております。何故かと申しますと、主イエス・キリストが御自分の御母に現今はとりわけ教会の支えとなる栄光を取っておかれたと心から確信しているからであります。”(『シャミナード師の手紙』第四巻、p. 230)

多くの者が修練院で暗記した有名な四か条の中に叙述されています。¹³ 後に、シムレル神父は会特有のしるしについての広範な教えの中で、この点についての註釈を提示しています。¹⁴

孝愛はシャミナード的靈性の一つの重要な側面、即ち、創立者が“私たちはマリアの子供です”と繰り返し強調していた私たちとマリアとの母子関係、を際立たせ、目立つものにしており、また、靈的生活にあってこの関係を具体的に生きることを助けてくれます。その結果として、シムレル総長時代から少なくとも第二バチカン公会議まで、私たちの伝統的マリアニスト信心に大きな影響を及ぼしてきたのです。ヌベール神父の“われらに与えられた神のたまもの”や“わが理想”などの著作は孝愛を発展させ、普及させるのに貢献しました。

しかしながら、私たちのマリアへの献身についてのこのような理解の仕方はシャミナード師のマリア的靈性のもう一つの基本的な観点——使徒活動——を日陰に残すことになりました。ヌベール神父自身もこの点に注意を促しています。“私たちがシャミナード師のプロジェクトの中

¹³ “すべての修道会は、いずれも同じ完徳を目指してはいるが、皆、同じ特別な召命を受けているのではない。各修道会はそれぞれ神から固有の賜を受けており、ある会は此のように、他の会は彼のようにです。マリア会にとっての神の賜物、マリア会の特徴をなし、他の会から区別するもの、それは至聖なる乙女マリアに対する全面的な孝愛である。”（『マリア会会憲』第 293 条）

“本会の立願者は、イエスがその最愛の弟子に言われた‘見よ、汝の母を’というみ言葉を記憶して、マリアの子と呼ばれ、また、マリアの子であることを類いもない幸福と考える。‘その母によりて、よろずの善きもののわれに来る’（知恵の書 7 の 11）ことを知るからである。”（『マリア会会憲』第 294 条）

“孝子のように、会員はマリアを敬い、愛し、人々にも愛させることを悦びとする。マリアに就いて考え、彼女に依り頼み、彼女の慈愛を語り、そして、マリアがどのように、確かに我らの母、我らの生命、我らの歓びの源、我らの希望の理由であるかを説いて、飽くことを知らない。”（『マリア会会憲』第 295 条）

“この孝愛の故に、マリア会員は、いわば本能的にイエス、マリアの生涯を真似ようとし、ナザレットの聖家族に最も目立っていた諸徳の模倣に特別な情熱を傾ける。とりわけ、謙遜、質朴、信仰と念禱との精神、ならびに家庭の精神がそれである。これらこそマリア会を特徴づける徳である。”（『マリア会会憲』第 296 条）

¹⁴ 『総長回章』 62 号 （1894 年）

に見出すマリア信心の全ての要素は、殆どシムレル神父の中にも見られます。とは言え、シムレル神父の教えには創立者と全く同じ響きがあるとは言えません。同じ要素が二人の教えを構成していると言っても、それぞれの調合の仕方は同じではないのです。シャミナード神父の教えに顕著な表現は‘マリアの宣教師’でしたが、シムレル神父にあっては‘イエスの孝愛の再現’なのです。シムレル神父も、創立者のようにマリアの使徒たるべき義務について強調してはいます。しかし、彼にとって、この義務はほとんどマリアについての知識と信心を広めることだけを意味しています。シャミナード神父にとっては、この義務は私たちマリアニストの全ての活動を含んでいます。何故なら、私たちがなす全ての行動一祈り、教育、日常の働き一にあって、私たちはマリアの名の下に行動していること、世界をキリストへと導いていることを意識していなければならないからです。シムレル神父のマリア信心はより観想的ですが、シャミナード神父のそれはより戦闘的です。”¹⁵

この焦点の違いは、シャミナード神父の会憲の第一章とシムレル神父のそれとを較べて見れば直ぐにわかります。私たちはこの両方の会憲の中で“マリア会は二つの目的を持つ”といわれていることを思い起こします。1891年の会憲は次のように述べています：1. (“**神の恩寵をもって**”とシャミナード神父は言っていますが) 会のメンバー一人一人を福音的完徳に成長させること； 2. (“**この世界で**”とシャミナード神父は言っていますが) 魂の救いのために働くこと (1839年の会憲には“**時代の必要と精神に適合した手段を用いて福音の教え、キリスト教の諸徳とカトリック教会の実践を支持し、普及させることにより**”と加えられています)；の二つです。二つの目的はつまるところイエス・キリストの最も忠実な模倣というただ一つの目的に要約されますが、それにはイエスの諸徳の模倣とイエスの使徒的熱誠の模倣という二つの観点があります。シャミナード神父が私たちのマリアへの信心を会憲の中の使徒的熱誠について述べる第5条に挿入しているのに対して、シムレル神父はイエスの徳の模倣について述べる第3条で扱っています：“マリ

¹⁵ 『われらに与えられた神のたまもの』(ノートル・ドン・ド・ディユ) (松口廣見訳 マリア会管区本部 1990年)、p. 73.

ア会の誓願者は、至聖なる母マリアに対する神的モデルであるキリストの孝愛を目に見える形で再現すべく、自らを奉獻するのである。”

この観点に基づいて、結果的に、ヌベール神父が指摘した通り、私たちのマリアとの関係は、人類についての神のご計画への奉仕におけるマリアとの“同盟者”の関係から、母マリアとの個人的関係において息子であるイエスの“模倣者”の関係へと変化してしまいます。

1.3 二十世紀後半に於けるマリア論の転換とその影響

この孝愛の故に、私たちの伝統的マリア信心は、ある批判者たちが“特権者のマリア論”と名づけた十九世紀及び二十世紀前半に見られるマリア論の流れの一部をなしていました。神の母というマリアの偉大な並はずれた特権から出発して、彼女を敬い、称揚するほかの特権が自然な流れとしてマリアに帰せられてきました。こうしてあらゆる種類の特別なタイトルに溢れたマリアのイメージができていく結果となりました。このマリア論の影響により、マリアは何か神学の中で切り離されたものとなり、マリア信心は時として強制された何か“追加的な”もの、あるいは、祈り、祭儀、説教には不向きなものとなってしまいました。民衆の崇敬とマリア信心はこの“切り離された”中で、殆ど自主的に広がっていったのです。典礼から切り離されたために、マリアについて神の言葉(聖書)の中で啓示されたものよりも、むしろ社会心理的な想像による考察からもたらされるマリアとの関係の持つ危険性を避けることは、必ずしも容易ではなかったのです。¹⁶

¹⁶ この危険についてシャミナード神父が既に述べているという事実は非常に興味深いことです。マリア信心について神父は次のように断言しています：マリアへの信心は慎重でなければなりません。…私たちの希望であるマリアを呼ぶ時、マリアが私たちの希望であるのは、イエス・キリストを通してであることに注意しなければなりません。そして、師ははっきりさせるため注意を付け加える。ここで、マリアの敵が勝ち誇った等と考えてはなりません。マリアへの信心を慎重にしようとするとき、私たちは、献身の感情をなくすることも、実行を中止することもしません…。私たちは、マリアへの献身は慎重で、賢明でなければならない、すなわち、思慮分別があり、真実であるべきことが分かっています。神は真

第二バチカン公会議は、“救いの歴史”という枠組みの中にマリアを位置づけ、観想することによって、この傾向に対して反応し、こたえました。公会議の教父たちは公会議準備委員会が予定したように独立した文書でマリアを取り扱うことに同意せず、マリアに関しては『教会憲章』の最終章“第八章”を充てることにしたのです。このようにして、マリアに関する公会議の考察は、その特異性をもちながら、神の民の歴史と現実の中に統合されているのです。ある解説者たちが記したように、公会議は“特権者”のマリア論から“先行者”のマリア論へと移行したのです。マリアは、教会の歩み、キリスト教的な歩みに“先行し”、それをご自身の中に前もって示す被造物なのです。結果としてはマリアの地味な提示となり、ある者たちはそれを“必要最小限”と評するのを躊躇しませんでした。しかしそれは大変な深みを与えていたのです。

教義を刷新し最新のものにするだけではまだ足りませんでした。公会議文書全体について今までにもあったことで、今後もまたあり続けることでは、未解決で非常に重要な問題が残っています：それは刷新された教義が信者のキリスト教生活の中に浸透し、彼らの信心に具体的な形を与えることに関する問題です。マリアのこととなると、教義から信心への移行は、伝統的、心理情緒的、文化的な要因が複雑に絡むが故に特に難しいのです。

マリア信心を神の民の中心に位置付けようとの配慮から、公会議後、非常に重要で基本的な文書が発表されました：それは1974年2月2日付パウロ六世の使徒的勧告『マリアーリス・クルトゥス』です。“教会の中で神の言葉に動機づけられ、キリストの霊の中で実行される聖母への

実によってしか讃えられず、神に帰せられるべき礼拝は慎重でなければならないからです。“これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。”（ローマの信徒への手紙12:1）。ところで、教会の掟、信仰の原理はわたしたちに何を教えるのでしょうか？まず、神のみ聖であり、全能であり、最高の善であり、わたしたちの至福であり、希望の最終目的であり、わたしたちの礼拝と愛の真の目的です。また、イエス・キリストは道であり、真理であり、命です。キリストによる以外、他のいかなる者によっても救いはありません。人々が救われるために与えられた名は、イエスの名以外にありません。（『マリアに関する記録』第1部、no. 34ff）

この信心を支え発展させること”を目指して、¹⁷ この文書はマリアへの適切な信心の鍵となる要素、そして結果的にその信心の表現である実践について詳細に分析しています。マリア信心の実践は、それに規範やルールを示すキリスト教的祭儀に鼓吹されたものでなければなりません。この文書そのものから引用し、要約して以下に列記してみましよう：

- 先ず第一に、おとめマリアへの信心業が、信心業そのものにとって内在的、本質的なものである三位一体的、キリスト論的な特徴を明確に表現することがきわめて適切なことです。キリスト教における礼拝とは、実際問題として、それ自体、父と子と聖霊である神にささげられる礼拝であります。すなわち、典礼が表しているように、聖霊において、キリストをとおして、父である神にささげられる礼拝なのです。
- おとめマリアに対する信心を表すにあたって、キリスト論的な側面が特に顕著でなければなりませんし・・・また、マリア信心のこのような表現が“マリアの誕生を、ただ一つの意志によって、神の英知である御子の託身のうちに”定めた神の計画を反映していなければなりません。このようなことは私たちにとって適切なことのように思われるのです。このことはたしかにイエスの母に対する信心をより堅固なものにしますし、また、この信心を“神の子に対する知識において一つのものとなり、私たちが成熟した人間となり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する”（エフェソの信徒への手紙 4：13）ための効果的な手段となるでしょう。
- この信心において、信仰における本質的な事実のひとつ、すなわち、聖霊とその働きを強調することが有益であるように思われます。事実、神学的な省察および典礼が明らかにしているように、聖霊がナザレトのおとめにやどり、彼女を聖なるものにしたこと

¹⁷ 『マリアーリス・クルトゥスー聖マリアへの信心についてー』（井上博嗣訳 中央出版社 1976年）、序文、p. 15.

が、救いの歴史における聖霊の働きの決定的な瞬間でした。

- 信者のうちに見られる主の母に対する信心の実践から、教会においてマリアが占めている位置がはっきりと見えることが必要です。彼女は“キリストに次いで最も高い位置を占めており、またキリストに次いで私たちに最も近いお方であります”。ビザンチン典礼の聖堂は、その建築的構造とイメージの用い方において、教会におけるマリアの位置をはっきりと示しています。至聖所の正面入口の中央の扉にはお告げの絵があり、後陣には栄光にかがやく神の母（テオトコス）の画像が描かれています。このようにして人々は、主の謙遜なはしための承諾によって人類が神に立ち返ってゆくことができるようになった様を感知することとともに、至聖なる乙女の栄光のうちに人類が歩む旅路の目標を見るのです。¹⁸

マリア信心が聖書と典礼に根ざしたものとなるように、そしてこの信心が人類学的、教会一致運動の観点から適切に表現されることに気を配るよう注意を促した後、伝統的なマリア信心の例として、パウロ六世はロザリオとお告げの祈りについての正しい理解と祈り方について上に述べた指針の見事な適用を示しています。

とは言うものの、『マリアーリス・クルトゥス』はその内容の充実性と深さにも関わらず、また、神学的考察の世界で広く受け入れられ、ヨハネ・パウロ二世の教えにまで取り入れられたにもかかわらず、¹⁹ 神の民の生活の中に相応しい反響を生み出しませんでしたし、今もなお生み出していません。例をあげますと、パウロ六世が勧めたようなロザリオ

¹⁸ 同、nos. 25–28.

¹⁹ ヨハネ・パウロ二世の教皇職はとりわけマリア的でした。『マリアーリス・クルトゥス』の流れに沿って出された同教皇の2002年10月16日付使徒的書簡“おとめマリアのロザリオ”は、マリア信心、特にその信心の持つキリスト中心主義について大きく啓発しています。更に、私たちは同教皇の1987年3月25日付回勅“救い主の母”も忘れてはなりません。その中で教皇は『教会憲章』の第八章に沿って、色々な考察の中でも特にマリアの信仰の歩みについて素晴らしい省察を示しています。

の祈りが何処でなされているのでしょうか？同教皇の示した基準に基づいて、聖歌やテキストや伝統的な信心業が何処で刷新されているのでしょうか？30年経っても、『マリアーリス・クルトゥス』は信者たちの信心に未だに影響を与えていないのです。何故でしょうか？今のところこの問題は残しておきましょう。後で、私は敢えて考えられる答をいくつか示唆してみるつもりです。

マリア信心はカトリック信者の中に歴史的にしっかりと根ざしているとは言え、実際のところ、公会議後、この信心が刷新されて開花した姿は見られません。それよりもむしろ、キリスト教徒の考察と生活にはマリアについての大きな沈黙がありました。伝統的なマリア信心と、必要だとは解るが口を閉ざしたままで誰も新しくしようと努めない何かの新しい信心との間で、神の民は当惑していたのです。地味な典礼が取って代わり、小聖務日課、ロザリオ、九日間の修業などの信心が姿を消していきました。その結果、多くの人々は自らのキリスト教生活の中でマリアとの係わりを失い、他の人々は、替わりのものがないので、古い信心業のまま残ったのです。それは私たちの間でも同様です。

このような状況にあって、私たちの伝統的“マリア的孝愛”は少なからぬマリアニストにあって信心を推進する動機付けを失っています。この“孝愛”の表明するところでは公会議の総合的観点の中でマリアを私たちの生活の中で生かし続けるには役立たなかったのです。その理由を徹底的に追求するとまでは申しませんが、その有する“無関心”の理由はその弱点中の次の二つに起因するのではないかと言えるようです：

a) 聖書的根拠の薄弱さ。“孝愛”でもってするイエスの観想は、新約全体に焦点を合わせるよりも、むしろイエスの人間面、心理情緒面、イエスのご自分の母との関係面に焦点が合わさっていました。イエスのその母との情緒的關係は新約の中には見出されません。それが存在しなかったとか、そんなことは想定できないなどと私は言っているわけではありません。受肉という現実から見ても、イエスがご自分の母に対して模範的息子の持つ子供としての愛を持っていた事は明らかです。私が言おうとしているのは、この関係を表現するような記述が新約聖書には全くないということです。逆に、福音

書の中に繰り返し明らかに見られるイエスのご自分の母への子としての情緒的従属性について示す“距離を置いた”“態度”は、理解するのが不可能とは言いませんが、謎めいた、困難なものです。

20

b) シムレル神父が孝愛の基礎としたものは明らかにキリスト中心です。しかし、その提示の仕方では、彼のキリスト中心主義は“マリア中心主義”に移行する危険を抱えています。“子がその母のために何かを拒否することなどありえようか？”などのような私たちの伝統の中でしばしば用いられてきた表現は、神学的意味ではなくむしろ人間情緒風に理解されていて、私たちがイエスを救世に係わる三位一体の計画のためにその母**と共に**生きたというよりも、その母**のために**生きた息子と見させかねなかったのです。

私たちマリアニストが私たちのマリア信心の新たな位置付け、新たな方向付けを行う必要があったことは明らかでした。公会議の光に照らしながら、私たちは私たちのカリスマを考え直し、表明し直しつつ私たちに固有な**現代化**の道を辿る必要があったのです。

²⁰ 純粋に情緒的観点からイエスとマリアとの間の関係を考える危険についてシヤミナード神父が既に警告していたのは興味ある事実です。マリアの被昇天についての訓話ノートの中で、師はこの秘義をイエスのご自分の母に対する子としての優しさの行為として解釈しかねない人たちを次のように批判しています：“マリアの功德が、本質的、根源的に、彼女の頭上に輝いた栄光の本源なのです。イエスが、子としての優しさに負けて、自分を体内に宿した方を最高の栄光に上げるためにそのすべての力を使うだろうということを想像できない人がいるでしょうか。これは私たちの持つ何という間違い！何という幻想でしょうか！イエス・キリストは、その救いの働きにおいて、最早、血肉にとらわれることはありません。福音書を開き、自分の使命を遂行しておられるイエスを眺めてください。彼は天におられる御父だけを見ておられます。‘婦人よ、私と何のかかわりがあるのです。’彼の返事は、私たちの秘義について教えられない人にとっては、マリアに向かって何か厳しいものを含んでいるようにみえることでしょうか。”（『文書と言説』第2巻、202.172、 p. 434）

1.4 私たちの“マリア論の転換”の取組み:

私たちがなしたこと、そしてなすべきこと

公会議によるマリアの提示は、聖書と教父たちという源泉に戻るとい
う観点からも、方法論からも、私たちマリアニストにとって喜ばしい驚
きであったことを私たちは認めざるを得ません。私たちは最も真正なシ
ャミナード的マリア論への回帰をそこに見たのであり、この事実は私た
ちが自分たちのマリアを観想する特別のカリスマ的な道を再発見し、新
たに表明することを助けてくれたのでした。私たちが公会議の“マリア
論の転換”と呼ぶものは私たちのマリアについての考察を停止させるも
のではなく、むしろ全くその反対でした。公会議に続いて、深い内容と
価値のある会員たちのマリアについての研究と著作が発表されました
し、今も発表され続けています。望ましいほど多数とまでは言えませんが、
それでもその数は考えられている以上に及んでいます。

こうして、公会議の示した指針に従い、マリア会は聖書への、そして創
立時の源泉への私たち自身の回帰を遂行できたのです。そして会は会憲
の歴史の中に於ける私たちのカリスマの疑いもなく最も優れた集大成
である『生活の規則』の新しい第一章を持つことが出来たのでした。
更に、『マリアーリス・クルトゥス』の示す指針を反映させつつ私たち
の最も伝統的な二つのマリア信心の表現である奉献の祈りと三時の祈
りを見事に改訂し、これら二つは神学的にも、カリスマの面からも非常
に豊かな二つのテキストとなりました。そしてこのようにして、最終的
に、この 25 年間、総会文書を通して、私たちはしっかりとした根拠を
持つマリア的、神学的、カリスマ的刺激を私たちの生活とミッションに
残し続けてきました。

しかしながら公会議について語った際に既に私が述べたように、教義文
書や教義規範の刷新と“現代化”だけでは足りません。それらを生活の
中に浸透させる任務が残っています。私たちはしっかりと確立された堅
固な教義を持っています。即ち、私たちは意味深く、啓発的な、素晴ら
しい文書を持っています。しかし、それらは心の中よりも頭の中に、行
動の中よりも言葉の中に、生活の中よりも紙の上に留まっています。こ

のことは私たちの修道生活の多くの面で事実なのです。そしてこれはまた、私たちのマリアとの関係においてもそうなのです。

前章で先送りにしていた“何故でしょうか”という質問に今ここで戻ってみましょう。私たちのキリスト教的・マリアニストとしての生活の中核を基礎にしてかくもしっかりと確立され、発展させられたマリアに係わる教義が、どのような理由で日常の生活に生かされていないのでしょうか？私は別の質問でもって敢えてそれに答えてみましょう：それは、私たちの霊的生活が教義と同じ中心に焦点を合わせそこなっているからではないでしょうか？

私は個人的に次のように確信しています。即ち、教義が生活に浸透することに関して不熱心で冷淡であり、それが私たちのマリアとの関係（それだけではありませんが）に悪影響を及ぼしているのは、私たちの霊的生活が本質的なものに中心を置かず表面的なものに留まっていることからくる、ということです。私たちは、根本に達しそこから出てくる深遠な表現を有していますが、私たちの日常生活は、霊的な面でも実践面でも、この深いレベルまで達したこともなく、それを自分のものにしたこともありません。従って、私たちの日常生活は単なる見せかけに過ぎない偽りの果実という罠に陥ってきたのです。というのは、この果実は、そこから自分が生じ、栄養を吸収する筈の根を持たないからです。

従って私たちは重要極まりない任務を前にしています：それは霊的生活を鼓吹し、養う中核まで私たちの霊的生活を引き入れることです。その案内図を見出す為に遠くまで行く必要はありません。自分たちを『生活の規則』によって導かせるだけで充分です。私たちはそこに宝を有しており、その富の豊かさはもっともっと探求されねばならないと私は確信するものです。それが持つ広がりを見出し、それを自分達の生活に組み込んでいく必要が恐らく私たちにはあるのです。以下に展開される考察がこの目的に向かう助けとなることを私は希望いたします。

II. キリスト教生活の中心にあり、その中心からの存在であるマリア

(『生活の規則』 第一章についての省察)

2. 1 キリスト教生活の中核:キリストとの一致の秘義を生きる

第 2 条

神は、マリア会への召命を通して、
すべての人の救いのために
マリアの子となられた神の子イエス・キリストに、
特別な仕方で従うよう招いておられる。
それ故、キリストに似た者になること、
および神の国の到来のために尽力することが
マリアニストの目的である。

第 3 条

私たちは先ず洗礼によって
イエス・キリストのうちに生きはじめるが、
修道者の召命は、
この洗礼に由来する信仰に基づく生活である。
会員は、信仰の共同体を作るために集まり、
この同じ信仰を兄弟姉妹と分かち合うことを目的とする。

第 4 条

会員は、信仰の人となるよう努力し、
すべてのものごとを、啓示に照らして判断する。
信仰によって、
人類の歴史や日常生活の中に、
神がどのように働いておられるかを悟ることができる。

先ず最初に、そして出発点として、『生活の規則』は靈的生活全体の基礎と最終目的をなすもの、即ちイエス・キリストとの一致を思い起こ

させます：“それ故、キリストに似た者になること・・・がマリアニストの目的である。”この文章はこれまでの私たちの会憲の伝統に沿ったものです。“本会が第一の目的とするキリスト教的完徳は、本質的に、人々に対する模範となるために人となられた神イエス・キリストに可能な限り完全に肖り奉ることにある。”と1839年の会憲は言っています(第4条)。そして1891年の会憲では“本会の第一の目的たる完徳とは、イエス・キリストに肖り奉ることをいうのである。”(第3条)となっています。

しかしながら、キリストとの一致についての現在の会則の視点、また、その理解の仕方と生き方は、以前の会憲、特に1891年のそれとは異なった形で示されています。以前の二つの会憲が続けて“すべてのキリスト者は福音の教えを守ることによってこの目的に到達できるが、修道会に属する立願者には、その上に、福音的勧告の実行が要求される。”と言っているのに対して、現在の『生活の規則』は直接に“**私たちがイエス・キリストのうちに生き始める**こととなった”洗礼の秘跡的秘義を思い起こさせるのです。

この変更は表面的なものではありません。これには霊的生活にとって深い意味があります。この変更を通して、『生活の規則』は私たちのキリスト教生活の基礎、即ち、キリストとの関係を改めて見直すよう求めているのです。私たちの多くの者は、生活のモデルや模範であるキリストの“崇拝者”に留まっているからです。ここで本当に問題となっているのは、キリストを模倣することによってではなく、キリストとの交わりの神秘を生きることによって、霊的生活をもう一度根拠づけるようにとの真実の呼びかけなのです。私たちがこの呼びかけのもつ意味とその影響を理解することは重要です。

キリストとの一致は、キリストを模倣することよりも何かもっと深いものです。“一致”(Con-form)とは“**何かの形 form を獲得する**”ことです。これはパウロの言う“キリストに**在る in Christ**”に沿ったものです。聖パウロが彼の生涯の最終目標、自分が追い求めた完徳をどのように表現しているか見てください：“・・・キリストの**内にいる**者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キ

リストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義がありません。”²¹

模倣が私たちの修徳的・倫理的努力に依存するのに対して、イエス・キリストとの一致は、私たちの中の聖霊の働きであり、これは私たちの努力だけでは達成できないものです。²² 模倣にあっては模倣される者（モデル）と模倣する者との間に距離があることが想定されています。より正確に言えば、その隔たりが模倣を誘発するのです。隔たりがあるが故に、模倣する者は、モデルがまるでユートピアのように地平線上に姿を表わしているだけでも、そのモデルを目指して歩こうとするのです。それで、模倣が隔たりによって誘発されるのに対し、一致は、キリストとの親しい交わりから来ます。この交わりを通して私たちは純粹に恩寵によってキリストに“合体”されるのです。キリストとの一致がキリストの模倣を鼓吹することは事実です。しかし、私たちはこれら二つを混同してはなりませんし、ましてや、一致を模倣にまで弱めるようなことがあってはなりません。

これは私たちがキリストを模倣しなくてもいいという問題ではなく、キリストの模倣を霊的生活の中に正しく根拠づけ、ふさわしい位置を与えるという問題なのです。このことは、私たちとの無限の隔たりという障壁を乗り越えて、私たちが御子と一つにする神の無限の愛の体験から正に来るのです。神の愛と私たちの愛との間にある（“隔たり”というよりはむしろ）不釣り合いを私たちに意識させて、神の愛の人間的な受肉であるキリストに従い、模倣することによって、彼と一致したいという望

²¹ フィリッピ人への手紙 3:9.

²² 指導に関する重要な著述ノート D の中で、シャミナード師は書いています：“マリア会における完徳は、マリアのご保護とその母としてのお心遣いのもとに、私たちの主イエス・キリストと一致することに基づいているので、イエス・キリストがこの世に来られた動機、イエス・キリストはどのように道であり、真理であり、命であるか、イエス・キリストはどのようにその霊を私たちに送ってくださるのか、イエス・キリストの霊はどのように私たちにイエス・キリストの命に生かし、神的な模範であるキリストに完全に似るようにしてくださるのか、このようなことをますます知ることが必要です。イエス・キリストとの一致全体はこのことのうちにあります。”（『指導書』第2巻、404b）

みを私たちに引き起こすのはこの体験なのです。ですからキリストの模倣（“like Christ” キリストのようになる）に生命を与え、この模倣を促進するのは、キリストとの一致（“in Christ” キリストのうちに）なのです。

多分、この原則を生きた最高の表現は聖パウロ自身の告白であって、彼はキリストのうちに在りたいという望みを表明した後、次のように告白しています：“私は既に完全な者となっているわけではありません。**私はキリスト・イエスにとらえられたので**、既にそれを得たというわけではなく、**何とかして捕らえようと**走り続けているのです”。²³ 実際、“キリストに捕らえられた”という先立つ経験がなければ、キリストを“捕らえたい”と言う望みは空しく、基礎がありません。それは気高いものに見えるかもしれませんが、実際には、幻想以外の何ものでもなく、危険な幻想です。何故なら、いつかは私たちを失敗へと導き、とてつもない疲労を引き起こし、そして“キリストのように在りたい”という気高い望みは、自分自身の犠牲となって消え去っていきます。何故なら、それは恩寵を通して“キリストのうちにある”という素晴らしい賜物を生きることに根ざしていないからです。どれほど多くの霊的生活、キリスト教生活、修道生活の放棄の原因がここに根ざしていることでしょうか！

ですから、私たちは霊的生活の中核として**神秘体験**を回復させ、育てなければなりません。既に見たように、『生活の規則』は私たちをここに招いているのです。

私がここまで確認してきたことは、稀にしか起こらないこと、或いは奇妙なこと、“体を離れた霊性”、あるいは何か偉大な聖人に関わることで、祈りの中での恍惚の域に関わることのようにさえ感じられるかもしれませんが、しかし、そうではないのです。神秘体験を回復させることは“祈りの専門家”や修道者のためだけではなく、忠実なキリスト信者には誰にとっても必要なことなのです。キリスト教生活は、**恩恵の秘義**（これこそ神秘的という形容詞が意味することです）の体験から湧き出て、そ

²³ フィリッピ人への手紙 3：12.

の体験によって成長していくか、あるいは、キリスト教的なものではなく、未だに旧約に根を置いたままかのいずれかなのです。何故なら、この体験こそが、キリスト教生活を特徴づけ、新約の新しさへと導いてくれるからです。この体験なしには、キリストとの関係は“人生の教師”と弟子との関係、ラビと弟子との関係に弱められてしまい、それ以外の何ものでもなくなります。そうすると、このキリスト教生活は、あたかも私たちがご託身によって開始され私たちが新約と呼んでいる神との何か別の関係に入っていないかのように、多かれ少なかれある種の“進歩的”か“保守的”な（この点について意見が分かれるが）生活の規範に従う務めに縮小されてしまいます。

この“神秘体験”は何に存するのでしょうか？ 十字架の聖ヨハネは神秘体験を総括し、暗示するかたちで、“愛をもって神の現存を自覚すること”と定義しています。神は歴史の中に、また、私たち自身の最も深いところに、恩恵を通して現存しておられます。信仰を通してのみ、私たちはこの神秘体験に到達することができます。『生活の規則』がまさに述べている通り、それは信仰に基づいた体験、信仰における体験、そして、信仰から湧き出てくる体験です。

- 私たちのキリストとの結合が現実のものとなるその時に、洗礼によって私たちのキリスト教生活に現れてくる信仰。“修道者の召命は、この洗礼に由来する信仰に基づく生活である。”（『生活の規則』第3条）
- 洗礼の瞬間から私たちを“神の現存の自覚”へ導く信仰、つまり、存在を新しい光で満たし、“あたかも目に見えない方を見ているように”歴史を歩んでいる人々の団体に私たちを加入させる信仰。²⁴ “会員は、信仰の人となるよう努力し、すべてのものごとを、啓示に照らして判断する。信仰によって、人類の歴史や日常生活の中に、神がどのように働いておられるかを悟ることができる。”

²⁴ ヘブライ人への手紙 11章参照 “信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、耐え忍んでいたからです。” (27節)

(『生活の規則』第4条)

- 神秘体験(“愛をもって神の現存を自覚すること”)を生み出す信仰。というのは、信仰は知識によるだけではなく、何よりも、典礼と祈りのうちに**結実している神秘**によって養われるからです。これは私たちの創立者が言う“心の信仰”ということです。“会員は、主の来臨を待ち望み、イエスが生活の中心となるよう毎日十分な時間を祈りのために捧げる。祈りの生活において、キリストの祈りであり神の民の祈りである典礼と、信仰の精神とを培う念祷とを特に重んずる。”(『生活の規則』第48条)“マリア会員の念祷は信仰の行為である。忍耐強い祈りの実践は、私たちを心の信仰へ導き、また、キリストとの一致、すなわち、私たちの目的に近づかせる。聖霊は、キリストによって、キリストと共に、キリストのうちに、私たちを父との一致に導かれるのである。”(『生活の規則』第58条)

2.2 私たちのキリスト教生活の秘義の中心にあるマリア : ご託身からカルワリオまで

私たちが“**キリストのうちに**ある”というこの神秘的、基本的体験は私たちにマリアへの正しい道筋を開いてくれるものです。御子に伴われて私たちが神の子へと変容させるこの単に意図的ではない真のキリストとの交わりの神秘を前にして、私たちは“そのような交わりはどのように可能なのだろうか?”と自問します。

その答は受肉の秘義から来ます。もし私たちが御子と“一致する”ことが出来るとすれば、それは御子とその愛の力と聖霊の力を通して、私たちと同じ人間の“身分”²⁵を受け入れたからです。“人間が神に似た

²⁵ フィリッピ人への手紙の言葉を文字通り読み直して見ましょう：“キリストは**神の身分でありながら**……自分を無にして、**僕の身分になり**、人間と同じ者になりました。”(2:6-7)

ものとなるために神は人となられた”と教父たちは言っています。“人性には神性を受け入れる余地がある、人性は神との交わりの中である”ということは、受肉からくるのであり、受肉のおかげなのです。

しかし、み言葉によって引き受けられた（キリストの）人間性は、受肉という出来事のために“無から”創造されたものではありません。キリストの人間性は人間性そのものから来しました。御子は“女から”、マリアから生まれ²⁶、私たちの一人となられます。私たちがマリアと出会うのは、ここ、この受肉の秘義なのです。つまり、この驚くべき出来事の根源、歴史の頂点、神の人類との新しい契約の始まり、においてなのです。創立者は何度も何度も“このマリアからイエスは生まれた”と繰り返していましたが、それはキリスト教生活の中でのマリアに固有な場、それを起点にして創立者がマリアを観想してやまなかった場、を強調するためでした。

第5条

おとめマリアは信仰の恵みによって、
神が救いの計画においてマリアにゆだねられた使命を
心から受け入れた。

イエスは、聖霊によってマリアの体内で形造られた。
イエスは、マリアが、ご自身のすべての秘義にあずかる
約束された婦人であることを望まれた。
時が満ちてイエスは、マリアを私たちの母と宣言された。

受肉の秘義におけるマリアを観想すれば、救いの業における彼女の役割が積極的で独特なものであることが分かります。他のどんな被造物である人間もこの役割を持ったことはありませんし、また今後もありません。この役割は、御子が人間性を受け入れる時に始まるので、受肉の瞬間から、マリアのうちに受肉された人間性を身におびて死を経て復活に至るまでの、キリストが人間として生きた全てのことにまで及んでいます。

²⁶ ガラテヤ 4:4.

こういうわけで、私たちの創立者が好んで繰り返していたように、マリアは私たちの救いに関わる全ての秘義に参与された、と私たちは確信をもって言うことが出来るのです。

こうして、お告げの時のマリアの観想と十字架の下にいるマリアの観想は相互補完的です。人間の救いに関する理法では、受肉においてマリアが聖霊の御手に委ねた人間性の従順は、キリストが御父のもとに上る“その時”の決定的な従順までは完成しないのです。

自分と共に、自分に倣って、母マリアを“その時”にまで導いて、その従順を完成させてくださるのは御子です。母マリアは御子を宿しましたが、救いの完成の“その時”、御父のもとに上る“その時”へと母マリアを導くのは御子です。マリアのうちに宿されたその同じ御子の人性が、御子によって御父のみ手に委ねて死ぬまさにその時に、マリアの母性は、御子と共に、御子のうちに、その救済的充満に到達するのです。救いの“その時”は、また、受肉におけるマリアの母性の持つ本当の広がりを実現する時なのです。

聖アウグスティヌスはこれについて見事に述べています。カナの婚宴で御自分の母に向かってイエスが言われた“私の時は未だ来ていません”というまさにその言葉を註釈して彼は言います：“母はイエスに奇跡を求めますが、彼は神のみ業を今まさに行なおうとするとき、人間的心情を無視するかのように行います。それはあたかも次のように言っているかのようです：“私の中にあって奇蹟を行う神の力を、あなたは生んだわけではありません。あなたは私の神性を生んだのではないのです。しかし、あなたは私の弱い人間性を生んでくださったので、私の弱い人間性が十字架に架かる時、私はあなたを認めましょう。”これが“私の時は未だ来ていない”という言葉の意味です。マリアが生んだもの（人間性）がまさに死のうとしているその時に、イエスはマリアを認めます。マリアに存在を与えた者が死ぬのではなく、マリアが与えたもの（人間性）が死ぬのです。神性の永遠性（永遠の神性）が死ぬのではなく、肉

の弱さ（有限な人間性）が死ぬのです。”²⁷

主が“最愛の弟子”に、また、彼を通して全ての真実の弟子たちに、マリアが“その婦人”、“私たちの母”であることを示されるのは、マリアから生まれたキリストの人間性がその人生の旅を終え、十字架上の御子を通して御父へと上ることによって救われる、まさにその時なのです。

2.3 マリアの母としてのミッション

第 6a 条

会員は、あのイエスの愛弟子のように、
マリアを神からの貴い恵みとしていただく。
会員は、イエスの母マリアに対する愛に駆られ
マリアに身をささげる。
それはマリアが母性愛によって聖霊の働きに協力し、
聖霊が会員をマリアの子イエスの
一層完全な姿に形造ることができるようにするためである。

“これがあなたの母です。”この啓示の意味するところは力強いものです。事実、もし私たちの救いを可能にするのがキリストの人性であるなら、もし私たちのキリストとの“一致”に門を開くのがキリストの私たちの人間性との“一致”であるなら、キリスト教生活に於けるマリアの役割は模範的信者であることを遥かに越えたものです。マリアはキリスト教生活の創造において不可欠な協力者なので、生命を生み出す母としてのあり方で聖霊に協力しながら、このキリスト教的生活を生み出すその中心点に位置しておられるのです。

この生命を生み出す力は何処から来るのでしょうか？彼女の信仰からです。マリアはその信仰によって母なのです。神の御子の人性は、マリアが信仰によって自らを完全に聖霊に開く時、聖霊によって彼女の中に宿るのです。女性として生命を生み出す身体的能力は、マリアが処女で

²⁷ 『ヨハネ福音書講話』VIII、9.

ある故に不可能であるが、それを可能なものにするのは彼女の信仰です。
（“どうしてそのようなことがありえましょうか。私は男の人を知りませんのに。”）豊かないのちへと彼女の胎を開き、み言葉と結ばれ永遠に留まる新しい人間性に生命を与えるのは、彼女の信仰です。

信仰に満ちていた“マリアは自分の胎内に宿す前に彼女の心の中に宿した”と聖アウグスティヌスは言っています。²⁸ ですから、教父たちがマリアを神によって単に受動的に用いられた方としてではなく、信仰と従順によって人類の救いの業に自由に協力された方として見るのは、まさに当を得たことなのです。というのは、聖イレネウスが言うように、マリアは、“従順であることにより、自分自身と全人類の救いの基となったのです。”このために、少なからざる古代の教父たちは説教の中で聖イレネウスとともに好んで次のように言っています：“エヴァの不従順によるもつれは、マリアの従順によって解かれた；おとめエヴァが不信仰によって縛ったものを、おとめマリアはその信仰によって解いた。”教父たちは、エヴァと比較しながら、マリアを生ける者の母と呼び、そして繰り返し宣言するのです：“エヴァによって死が、マリアによって生命が来た。”²⁹

シャミナード神父を魅了したのは、このマリアの信仰の持つ生命を生み出す力です。“しばらく前から、ほんのごく最近、私が賛嘆してやまないことは、マリアが受肉のときに、信じがたいほどの大きな愛に鼓舞されたその生き生きとした信仰によって、絶えず豊かないのちを生み出される御父に協力する者となられ、そして、尊い御子が身にまとわれる人間性をお産みになったという事実です。愛する子よ、それと同じように、イエス・キリストを自分の内に宿らせるのは信仰です。‘信仰によってキリストがあなたがたの心に住まわれるように（エフェゾ 3：17）、言（ことば）は・・・神の子となる資格を私たちに与えた（ヨハネ 1：12）’。マリアの内にある神のすべての宝は、マリアを生き生きとさせた信仰に起因しています。マリアは、恩恵に満ち満ちたもの、命の源となりました

²⁸ 『説教』 no. 215.

²⁹ 『教会憲章』（Lumen Gentium） 56.

た。ちょうどマリアが信仰のうちに自然の秩序においてイエス・キリストを宿したように、非常に現実的な意味で、私たちも信仰によって超自然の秩序においてイエス・キリストを宿す力を持っているのです。”³⁰

これをもって、シャミナード師はマリアの母としてのミッションが普遍的であることを理解したのです。“み言葉の受肉に同意することによって、至聖なる乙女は最も影響力のある効果的な方法で救いのみ業に貢献されました。同意というまさにその事実によって、ちょうど母が誰でも自分の子どもを胎内に宿すように、マリアはすべての人々をその胎内に宿したと言えるようなかたちで、一身をお捧げになられたのです。”³¹

従って、この信仰に満ち溢れたマリアの母なる胎内で私たちが形づくられるままになることによるのみ、私たちはキリストと一致できると確信したので、シャミナード師は自分自身を、また、私たち自身を“マリアの子”として以外には考えようがなかったのです。³² 会憲を仕上げようとした指導に関する自筆ノートの中で、会憲を活かす精神を敷衍し、修道者の霊的養成のための指針を示しながら、創立者は書いています：

1. “新しい修道会は**マリア会**と名付けられる。会員は皆、自分をマリアの子供とみなすからである。多分、彼らを**マリアの家族**と呼ぶべきかもしれないが・・・。

³⁰ ペロダン師への手紙、1843年3月1日(『マリアに関する記録』第2部、no. 116)

³¹ 『マリアに関する記録』第2部、no. 662.

³² “キリスト信者の母マリア”と題する『マリアに関する私たちの知識』についての小論の第五章で、シャミナード師は以下のように結論しています：“したがって、私たちは確かにマリアの子供です。子どもがその母に属するように、私たちは母マリアに属しています。イエス・キリストは、そのいのちを私たちと分かち合う際に、マリアのうちに、マリアを通して、私たちをその本性にあずかる者とされましたが、それは、私たちの魂の父であるイエス・キリストとのマリアのえも言われぬ一致の結果として、私たちがマリアから霊的に生まれるためです。この秘義の深さを測ろうとするまでもなく、神のみことばが尊い乙女の胎内に僕の姿をとってご自分をむなしくされた時、マリアは信仰によってその魂にキリストを宿されたが、それはご自分が真にもう一人のキリストになるためであった、と私たちが知るだけで充分でしょう。そして、マリアはキリストのすべての思い、すべての感情に結ばれていたので、自分が新しいエバであることを知って、自分のうちに、自分と共に、私たちが霊的に産むことを望まれるその子イエスの尊いみ業に全面的に参加されたのです。”(『マリアに関する記録』第2部、no. 491)

2. 真のキリスト者は、ただ私たちの主イエス・キリストのいのちを命として生きることしかできないし、また、そうでなければならない。修道者は特別な生き方でこの命を生きるように召されている。この神的不いのちこそ修道者のすべての考え、すべての言葉、すべての行いの原理であるはずである。
3. イエス・キリストは聖霊の働きによって尊いマリアの胎内に宿られ、マリアの純潔な胎より誕生なされた。“・・聖霊によって宿り、おとめマリアより生まれ・・”
4. 洗礼と信仰はイエス・キリストの命を私たちのうちに誕生させ、洗礼と信仰を通して、私たちは聖霊の働きによって、いわば、身ごもられた訳であるが、しかし、私たちは救い主のようにおとめマリアから生まれるよう予定されています。
5. イエス・キリストはマリアの純潔な胎内で私たちに似た者となることを望まれた。同様に、私たちは、マリアを通してキリストのうちに形づくられねばならないし、マリアの活動、その性向、その人生に従って自分の活動、性向、人生を方向づけなければなりません。
6. マリアが御自分の胎内に抱かれるすべては、イエス・キリスト御自身でしかあり得ないし、あるいは、イエス・キリストのいのちを命としてしか生き得ないのである。マリアは、私たちのうちに御子の主要な特徴を刻み、私たちを御子のようにお生みになるまで、想像に絶する愛をもって、私たちを小さな子供として御自分の清い胎内に抱かれる。”³³

多分、私たちは今、『生活の規則』第6条の“マリアが母性愛によって聖霊の働きに協力し、聖霊が会員をマリアの子イエスの一層完全な姿に形造ることができるようにするため”という文の持つ豊かさと深さをより良く理解できるのではないのでしょうか。

³³ 資料館の帳面 D、H 文、『指導書』第2巻、nos. 334-339. このキリスト教生活の基本的原則に関する論理的連鎖は、1827年の黙想の主たるテーマであり（『マリアに関する記録』第2部、nos. 821-834）、創立者の教えに繰り返し現れて来るものです。

2.4 世の救いのためのマリアの子供たち

御子の似姿に形作られるために、“会員は、イエスの母マリアに対する愛に駆られマリアに身をささげる”と私たちは『生活の規則』の中で言います。ですから、私たちのマリアへの献身は、あらゆる点で、マリアに対するイエスの愛、即ち、イエスが人として形作られるために自らをマリアに委ねたその愛から来るのです。

私たちはすでに長い道のみを経てここまで来たので、“ご自分の母に対してイエスの抱かれた愛”が、心理情緒的なものを遥かに越えて深く“秘義的な”根を持っていることを理解します。この愛は、神が受肉において愛をこめて御自分を人類に渡された行為に含まれているのです。この愛は、神の計画から、つまり、救おうとする神の意志から出たものです。従って、これは自分を宿し生命を与えてくれた母に対して子供が抱く愛とは同じものではありません。これは永遠からの選びにおいて示される、先在の愛です。天使がお告げの際にマリアに知らせるのは、この先在の愛なのです。この愛は、聖パウロの言うように、父なる神が私たちを聖なる者にしようと予定された三位一体の根源的な愛の一部をなすものです。³⁴

人類に御自分の愛を与えるために、一人の女性、マリアに具体的にそうされるのは、救いのご計画において溢れ出るあの広大無辺な三位一体の愛なのです。御主が自らをご自分の母に委ねられるその愛は、救いの愛に他なりません。信仰に満ちたマリアは、御子が“肉となる”ため、即ち、私たち人間の歴史に具体的に入るために必要な人間的な形を、手で触れることができるかたちで、また、自発的に、御子に与えるのです。

イエスにおいてマリアに子として自らを委ねることにより、神の愛は人間としての身分となります。御子はマリアから人性を受ける為、マリアにご自身を与えます。御子はマリアの母なる胎内で“人間の体”を愛し、受け入れますが、マリアの方は自らを彼に開き、信仰でもって彼を

³⁴ エフェソ 1:3-4 参照.

抱擁します。この相互の愛に満ちた抱擁の中で、神の無限の愛は、幼子としての誕生から死に至るまで、しかも、十字架上の死に至るまで、人間的変遷に服するのです。“子供は成長し”、そして、“彼らに従って生活された。”³⁵ こうしてマリアの胎は、弱い人間性の中に神の神聖な愛の力が隠れる場、人間的なものの中に神的なものが隠れる場となるのです。“彼は大工で、マリアの子ではないか？”³⁶ 聖パウロはこの秘義を“ケノーシス”、即ち、“愛によって自分自身を無にすること”として見るのです。³⁷

イエスにおいてマリアに子として自らを委ねることにより、神の愛は御父を啓示するために兄弟としての身分となります。マリアの子であることとすべての人の兄弟であることとは、御子において合致しています。御子は（マリアの）子ですから（すべての人の）兄弟であり、兄弟ですから子なのです。このようにして、御子は御父の愛の啓示と明示に向けて門を開きます。彼は、マリアの子となることによって自分自身を私たちの兄弟とし、私たちを兄弟として認めることによって御父の子供とするのです。神の父性がこの世に入ってくるのは、彼の兄弟としての身分を通してなのです。“イエス・キリストは、私たちを神の子、御父の子となすためにアダムの子供となりました。（自分を私たちと結びつける

³⁵ ルカ 2：51ff.

³⁶ マルコ 6：3.

³⁷ この観点から私たちはシャミナード師がイエスのマリアに対する“服従”について強調することを理解できます。師はこの言葉を、その最も正当な意味で、非常に具体的に、また体で感じられるように、観想してやまなかったのです。“マリアは神の母になりました。神はマリアの純潔な胎内に宿りました。その神性は、消滅することなく僕の姿をとり、マリアの胎内に住まわれました。イエスが生まれるとき、悲しみと罪の中に宿された普通の子供のようにマリアに依存し、その権威に従われるイエスを見るのは、何と賞賛に値することでしょうか。神の御子は、ご自分に対して母としてのすべての義務を果たす一被造物によって世話され、はぐくまれ、躰けられ、衣服を着せてもらいました。自らを支え、その必要を満たす事も出来ず、永遠のみことばは幼子となり、御母マリアのひざや胸で休み、その乳房で養われ、その優しい愛撫を乞い、彼女に服従し、喜んでその命に服したのです。”（『マリアに関する記録』第2部、no. 461）そして、会憲のための師の全ての草案には、“彼は彼らに従っていた”というルカ福音書からの引用が必ず載せられていました。（1828年の会憲、第5条参照）

二種類のきずな)。キリストの父は私たちの父となり、私たちの父はキリストの父となる。‘**私の父であり、あなた方の父である方のところへわたしは上る。**’ イエス・キリストはあらゆる点で私たちの兄弟となるため、同じ寛大さをもって、その尊い母を私たちに母として与えました。マリアはすべてのキリスト者の母となるために、永遠の御父と一つに結ばれています。”³⁸

イエスにおいてマリアに子として自らを委ねることにより、神の愛は教会を生む花嫁となります。マリアの胎内で形作られた御子はまた、私たちが以前に見たように、普遍的救いの豊かさに向けてマリアの母性を開きながら、マリアを形作る者でもあります。御子はまた花婿でもあります。これはまさに、多くの教父たちが述べたように、ヨハネ福音書の持つ観点であって、この福音書の中でイエスはご自分の母を常に“婦人”と呼んでいるのです。³⁹ カナの婚宴での本当の花婿は誰でしょうか？ 私たちの創立者がかくも愛したカルワリオの場面の持つ深い意味を、多分、私たちはこの観点から理解しなければならないのではないのでしょうか？ そうです、まさにこの救いの“時”に、イエスは“御自分の母のそばに居る弟子を見た”のです。母と子の関係で結ばれた婦人と弟子、これこそ御主が残されるこの世を旅する新しい人類なのです。これが、母と弟子の二重の身分にある教会なのです。母なる教会は、配偶者（キ

³⁸ 『マリアに関する記録』第1部、no. 82.

³⁹ “まず第一に、イエス・キリストは、その生涯においてマリアを婦人というこの偉大な名で呼ぶことを喜びとされました。この事実は注目に値します。……ある人々がこの場合の神の子の思いやりのなさのようにみえることを弁護しようと努力した様々な解釈を、私たちは拒否するつもりはありませんが、人類の救い主がその御母に呼びかける時、婦人という名を使われた主な理由は、マリアが救い主と共に約束された婦人、新しいエバであるという一つの偉大な事実を私たちに理解させ、絶えず想起させるためだったのではないのでしょうか？”（『マリアに関する記録』第2部、no. 471）

“聖ベルナルドによれば、人類が生まれるためにはアダム一人であることは適当なことではなく、彼にふさわしい助け手が必要であると思われた。それと同様に、永遠の神意において、新しいアダムであるイエス・キリストが人類の霊的誕生において一人でないことが相応しいことでした。したがって、新しいエバ、マリアは、キリストに協力するふさわしい助け手なのです。”（『マリアに関する記録』第2部、no. 467）

リスト)の贈りものであるそのみ言葉、そのご聖体、その霊、その脇腹から流れ出た血と水を通して豊かなものとされ、新しい創造へと向かう新しい人類の生命を生み続けます。“母よ、これがあなたの子です。”弟子は、母なる教会の胎内で形作られるままになるため、母なる教会の持つこれらすべての贈りものを自分の最も貴重な賜物として受け取ります。“子よ、これがあなたの母です。”⁴⁰

今や、私たちは『生活の規則』第2条の初めの文に含まれた力を理解します。“神は、マリア会への召命を通して、すべての人の救いのためにマリアの子となられた神の子イエス・キリストに特別な仕方で従うよう招いておられる。”彼と共に、彼のように、マリアの子となることによって、私たちは、人間としての身分、兄弟としての身分、子としての身分になられたこの(神の)愛のなさり方と一つに結ばれるのです。それによって、私たちは世の救いのために人類と教会を抱擁し、愛することができるのです。

『生活の規則』に基づいたこの省察を通して、どのように、また、何故、シャミナード師はマリアの母性を救いの歴史に於ける彼女の偉大な

40 この場面について繰り返して観想していたシャミナード神父はこの婚姻と教会という観点から思いを逸らせることが出来ませんでした。聖母マリアのあわれみについての一つの説教の中で、“わたしはミルラの山に、乳香の丘に登ろう”(雅歌4:6)と歌う花嫁にマリアをなぞらせ、シャミナード師は言います。“‘行きましょう’と言われるのは、**イエス・キリストの真の花嫁**であるマリアです。私もその模範になりたいと思います。私はシナイ山より険しいこのあの山に登り、苦悩と恥辱に身を任せたいと思います。・・イエス・キリストはすべての人々のために苦しめます、ただし、人々はその救いを受け取らなければなりません。**マリアは、自分が十字架の下でお産みになったキリスト者の母として、また、イエス・キリストが遺言として実際にそのようにお計らいになったキリスト者の母として、教会を代表しています**”。(『マリアに関する記録』第1部、no. 214)

“イエス・キリストの人間としての死は、古い人の死と新しい人の完成を神秘的に表していました。したがって、キリストの脇腹から流れ出た血と水は教会を表していたのです。眠っていたアダムの脇腹から作られたエバはこの深い秘義のかたどりでした。イエス・キリストの死を通してマリアは死を体験しました。御子の脇腹を貫いた槍は、マリアの美しい魂をも貫きましたが、このことはマリアご自身においてその同じ秘義、つまり、教会の成立を私たちに示していました。私たちは、‘マリアは私たちをお産みになった’ということが出来るのです。”(『マリアに関する記録』第1部、no. 76)

ミッションとして観想したのか、どのように、また、何故、シャミナー
ド師はそこに私たちのミッションに向けての神の呼びかけを見出した
のかを、私たちが理解する一助となるよう願っております。以上述べて
きたすべてのことが、私たち自身の宣教的な献身にとってどのような意
味をもち、どのような帰結になるのかについて省察することは、神様が
御望みであれば、第二の回章で取り扱いたいと思います。

親愛なる兄弟の皆さん、今回の回章はここで終りとさせていただきます。
私はキリスト教生活の中心となる秘義の中でマリアと出会う道を述
べてきましたが、願わくは、このことが皆さんにとって、マリアが私た
ちのカリスマの中で占める場を（それはマリアがキリスト教生活全体
の中で占めている場に他ならないのですが）その深みまで再発見する手段
となるよう希望します。しかしそれ以上に、マリアニストとして創立者
の後に従う私たちには、これを理解し、また知らせる賜物が与えられて
います。

どうか皆さん、私と共にこの偉大な召命を神に感謝してください。そし
て、私たちが熱意と誠実さを込めてもっともっとこれを愛し、これを生
きるよう、助けを神に祈り求めましょう。

人々の救いのためにマリアの子となった神の子イエス・キリストに於け
る皆さんの兄弟、

マリア会総長
マヌエル J. コルテス, SM

2007年3月25日
お告げの祝日に